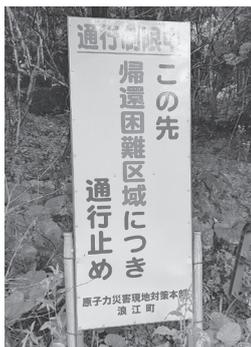


発行所
 日本聖公会 東北教区
 仙台市青葉区国分町2-13-15
 TEL 022-223-2349
 FAX 022-223-2387
 URL <https://nssk-tohoku.com/>

東北教区報 2025年8月号

あけぼの

最近あまりテレビを見なくなってきたが、これは必ず見ようと思う番組のひとつにNHK地域局発番組「限界集落住んでみた(仙台局制作)」があります。ディレクターが限界集落と呼ばれる地域に1カ月間滞在し、住民と交わり、その地域の生活を体験するという内容です。先日の番組は宮城県伊具郡丸森町筆甫地区北山集落からのものでした。町の中心部からは、かなり離れた山間の地域です。取材者は地区の公民館や集会所に間借りし、自炊しながら生活します。そこに「ちゃんとお食べてるか？」と差し入れに来てくれる地元の方々に



シリーズ「東北の信徒への手紙」
「人のゆえに地を呪うことはもう二度としない。」(創8:21)
 司祭 ステパノ 涌井 康福

ほっこりさせられますが、この集落でも共通する話題は過疎化のことです。「自分たちはここで生まれ育ち、ここが好きだから離れるつもりはないけれど、若い人たちには住みにくいんだろうな。」と寂しく笑う人たちの姿はこの集落にも共通したものがありませんが、次の一言にハッとしました。「それでもな、ほんとはもっと人がいたはずなんだ。それがあの放射能の事故で…帰ってこない人も多いな。」確かに原発事故の当初には丸森町の一部にも避難指示が出ていたことを思い出しました。原発事故の被災地というと福島県浜通りが思い浮かびますが、飛散させられた放射性物質が人間が引いた県境で止まってくれるはずもなく、これも原子力災害被災地だったのです。

わたしは東日本大震災以降被災地訪問が可能になったところ

ころに教会のメンバーを誘ったり、個人的に出かけたりしていました。ここ数年あまり行くことができなくなりました。福島に勤務しながら浜通りにも行っていません。もちろん街中に入ることもできない時期がありました。現在主要道路はほぼ通行可能になり、わずかながら人も戻ってきています。行くだけ行ってみようかと思いましたが、浪江町役場周辺では人通りも多く、街頭の線量計もそれほど高い数値を示しています。しかしそこに至る山間部の道路上では除染はされているのでしようが1.00(μSv/h)でしようか? 近いかそれ以上を示しています。道路わきには避難以降住民が戻っていないことを思わせる草生した住宅が点在しています。それにどこかの集落に続きそうな脇道には「帰還困難区域につき通行止め」の標識が何か所も設置されています。ある程度戸数がある集落では除染がなされ、生活されている人もおられるようですが、ここでも小さな者が見捨てられてしまっているのでしょうか。誰もが完ぺきな除染などできるわけがないと思っていたので

しょうが「すべて除染する」と国は言っていないかったか、と悶々としながら大熊町に入ると、国道沿いでも原発近くでは線量計が「2.00」以上を示していました。「まだ終わってないのだ」と改めて思い知らされました。地震や津波は、仕方がないとは言えませんが、防ぐことはできません。でもその時に命を守る努力、備えをすることはできます。

原発も防災に努めてはいたのでしよう。しかし万が一の時のリスクは軽く見ていたのでしょうか。放出された放射性物質のひとつセシウム137の半減期は30年。何もしなければ「帰還困難」はまだ続くのです。こんなことが複数箇所で起こったなら、考えるだけで恐怖しかありません。「資源のない日本は原発も使わなければいけない。温暖化抑制にもなる」そんな声が大きくなっています。今だけの便利のためにその声に流されるのか、将来を見据えて否と言えるのか。不届も貧しさも受け入れることができるのか。それが私にも突き付けられています。

(福島聖ステパノ教会牧師)

2025 耳を傾けようキャンペーン 神のみ声に、人々の声に、そして世界の声に耳を傾けよう ～となりびととなるために～

2023年に開催された「日本聖公会宣教協議会」からの「呼びかけ」を受け、東北教区ではその応答の第一歩として、昨年「東北教区宣教協議会」を

開催しました。そして参加者一同、あらためて「呼びかけ」で謳われている「神のみ声に、人々の声に、世界の声に、耳を傾ける」ことの大切さを確認しました。宣教協議会準備委員会が閉じられた後、より広くこの確認を周知・共有するために「2025修養会実施プロジェクト」が起てられ、今年11月には山形聖ペテロ教会を会場に、この「呼びかけ」をテーマにした修養会を開催することが決まっています。

また主事会議では、教区内のすべての教会、幼稚園、こども園での活動において継続的に意識していただくことが必要であるとの認識に至り、2025 耳を傾けようキャンペーンの展開を提案しました。「耳を傾けること」の大切さは、今回の宣教協議会で初めて提唱されたことではなく、旧約聖書では「聞け、イスラエルよ(シエマー・イスラエル)」が重要な言葉として認識されており、イエス・キリストも最も大切な教えの一つとして取り上げていることから、聖書全般を通しての基本だと言えます。その意味では、この原点にあらためて立ち戻り、これを基盤に持つことで、時代の流れや社会の変化の中で福音宣教を展開していくことができるのだと考えています。

どうぞ、こうした主旨にご賛同いただき、2025 耳を傾けようキャンペーンにご参画いただきますよう、よろしくお願いいたします。(東北教区主事会議・2025修養会実施プロジェクト) 広報グループはこのキャンペーンに賛同し、今月号より呼びかけを誌面に掲載いたします。(4頁に掲載)

北海道・東北合同教役者会に参加して

司祭 ヤコブ 林 国秀



にしたい。牧会セクションを置き、チームミニストリーの研究、葬儀など地域習慣を分かち合う。任意団体の今後の展望。

【宣教】交流プログラムの展開が必要。信徒交流プログラムの充実、実施。出会いと交わりの日を信徒参加プログラムとしてはどうか。教会間交流の推進。

【広報】まだ自分事となっていない現状への対策。情報量が多いほど疎外感を感じるので、汲み上げが大切。

【組織】検討中の組織図の検証を進める。決議、執行機関が明確な組織図に北海道教区も合わせたい。

【財政】分担金の算出方法の変化が不安。教役者の給与は献金で賄うという原則を大切にしたい。

【その他】信徒の奉仕がより大切になるので教育、訓練、教材などの整備が必要。伝道師、特任聖職の再評価と並行して養成プロセスの見直が必要。



2日目は改正祈祷書試用版を用いた聖餐式を行なった後、白老町の民族共生象徴空間「ウポポイ」を見学し、アイヌ民族の歴史、文化を学びました。その後、支笏湖畔の施設で1泊し、3日目は各教区、各教会の近況報告、情報交換を行い解散しました。大変有意義な会となりましたこと、ご準備くださった北海道教区に心から感謝を申し上げます。最後に、今回改めて北海道教区はアイヌ民族との融和、共生を大切な使命として歩まれていること、そして私たち東北教区はそのような北海道教区と宣教協働を進めていることを忘れてはならないと感じました。今後、北海道を訪問される皆さんには、ぜひウポポイ等の見学をお勧めしたいと思われました。

日本聖公会婦人会 第28(定期)総会報告

東北教区婦人会会長
ソフィア 赤坂 康子

日本聖公会婦人会総会が、6月17日、18日に横浜聖アンデレ教会で開催されました。上原榮正首座主教他3主教、管区総主事の矢萩新一司祭他司祭8名、各教区婦人会から代議員と傍聴者、総勢60名以上が集まりました。

日聖婦役員会、アジア教会女性会議からの報告があり、感謝箱献金お献げ先に関する議案①ケニア児童養護施設②コンゴの子どもへの暴力防止活動③ミャンマーの民主化活動④バングラデシュへの医師派遣⑤「国際子ども学校」⑥沖縄のヘリ基地反対協議会の働きの為⑦釜石支援センター⑧望(東北教区婦人会提出)は、全て承認されました。次期会長選出教区は選挙の結果、大阪教区となりました。被献日献金からの支出は、昨年度は3名の神学生への書籍代、7名の聖職者に按手祝金、各教区婦人会のために出費され

ました。日本聖公会婦人会員総数は現在1645名、昨年からは203名の減少です。2日目はパイプオルガンの響く礼拝堂での素晴らしい聖餐式があり、首座主教による説教、信施金は能登半島地震対策室の働きのために献げられました。分かち合いでは「婦人会のこれから」をテーマに活発な意見交換がなされました。「婦人会」の名称についても違和感を覚える会員は多いです。笹森田鶴主教は「私たちは何をしたいのかを明確にして言語化すること。日本聖公会はこれまで婦人会に大変支えられてきた。日聖婦の細やかなネットワークは、他にはない」とお話しくださり、管区の女性デスクの大岡佐代子司祭からは2030年には議決権行使の場での女性が40%を目指す「203040」について、また毎年開催される「女性に対する暴力の根絶を求めて祈る週間」への関心と参加の呼びかけがありました。

同じ思いを持つ仲間から大きな力ををいただき、帰ってきました。



苦小牧聖ルカ教会

苦小牧聖ルカ教会は、1954年、ハンセン司祭によって、宣教の拠点として本格的な活動を開始した。礼拝堂内部は「ノアの箱舟」をイメージして作られ、救いの箱舟としての思いを込めて、すべての人々に開放されている。1986年には、市内諸教会と共に、苦小牧船員奉仕会を設立し、多くの働きをしたが、2022年解散。現在、付属施設聖ルカ幼稚園と共に歩むべく幾つかの試みを始めている。礼拝は毎週で、出席者は平均10名前後。礼拝後の聖書輪読会を大切にしている。



主教コラム

6月15日
(日)、京都教区
の京都伝道
区合同礼拝・
合同堅信式が
主座聖堂聖
アグネス教会

で催され、管理主教である私が司式説教を執り行いました。受領者は洗礼堅信1名、堅信6名の計7名で、9歳お二人、10歳、15歳、47歳、55歳、80歳の方々でした。親、子、孫といった年代で、それだけで一つの家族を見ているようでした。教会別では下鴨、桃山、聖アグネス、京都復活の4教会でした。

るで、10歳の子の「今日は僕のために集まってくれてありがとう！」との発言には、みんなの温かい笑い声が溢れました。私もプレゼントを手渡しながら「私たちは勿論、あなたのためにここに集まりましたよ」と返答し再び歓声と拍手が聖堂内に響き渡りました。主に感謝です！

聖堂は約200人の会衆で一杯になり、大きなお恵みにあずかりました。コロナ禍で中断していた合同礼拝が復活されて、皆さんとても喜び嬉しくて、思いっきりの声で歌い賛美し、満面の笑みで主の平和の挨拶を交わして、礼拝後にはこんなに晴れやかな気持ちになったのは実に久しぶりだと、あちこちで感激の言葉が聞かれました。

私は、京都で過ごしていた時以来、実に34年ぶりにお会いする人たちもいて、懐かしいお顔を見ながら信仰に結ばれて、主に在る交わりにあるのは有難いことと実感しました。同時にこの場に來ることが叶わなかった人たちもおられると思うと、その人たちに神様のお支えとお守り、祝福がありますようにと祈ります。「神の御心を行う人は誰でも、私の兄弟、姉妹、また母なのだ。」(マタイ3:35) 洗礼堅信された信徒たちも、そこに集った人たちも、様々な理由で來られなかった人たちも全員が主の家族です。神のみ心を常に追い求め、力を尽くして神様の愛にお応えしてまいれるようにと、神よりのお導きを祈るものです。(教区主教)

中でも、礼拝後に堅信受領者が一人ずつ挨拶されたところ

